

高齢化社会の療養環境と看護

看護局長 甲田久美子

先日、大学看護学科の『宣誓式』に出席した。ナイチンゲール像の灯火だけの会場で、2年生がひとりひとりのろうそくに火をともしキャンドルサービスが举行される中、30年以上も前に、戴帽式に臨んだ事を思い出していた。当時は臨床実習開始にあたりナースキャップを頂く『戴帽式』という名称だったが、10数年前から感染面と機能的な面からナースキャップはほとんどの病院で廃止されている。看護学生時代に『ナイチンゲール誓詞』を誓った日を思い出しながら2年生による『宣誓の言葉』を聞き、身も心も引き締まる思いにかられていた。宣誓の言葉には「国際社会の変化に対応しその人らしく生を全うできるように看護を提供する」という文言があり、少子高齢化・人生の最終段階・介護予防等々のフレーズが頭の中をよぎった。

生誕100年を迎えているナイチンゲールは、当時戦地において年間2000人もの臨終に不眠不休で立ち会ったとされ、「ランプオブレディ」の名でも親しまれている。また、収容施設の建物構造や空調、療養環境や感染についても統計学的に分析し、陸軍統括への進言をしている。これらの内容は、生きるための基本となり、家庭でも行われている食事・睡眠・清潔などについて書かれた「看護覚え書き」の書となり、オレムやヘンダーソンとともに「看護」のバイブルとなって受け継がれている。医療技術のめざましい進歩は留まることはないが、看護の原点は100年前と変わらない。すなわち看護は、非侵襲的な視点でのケアであり、満足していただく為にひとりひとりへの対応は、非効率的なことも多く、手間暇がかかることはやむを得ない。24時間365日継続される看護提供は人間が生きていくため、健康な人々は習慣的に繰り返している日常生活に必要な事項を満たしていなければならない。

昨今当院に限らず、高齢者の入院患者が増加している病院や施設では、認知症状の方や入院という療養環境（生活環境）の変化によるせん妄症状など、治療や医療のための診療介助だけでなく、患者・入所者の見守りや話し相手の役割時間も多くなってきている。病院における看護は、点滴やカテーテルなどの抜去防止や転倒転落防止など、患者の安全確保を大前提に人間の尊厳を維持するための「拘束しない看護」も望まれており、療養環境や看護職の業務範囲、人員配置など課題は山積している。また、健康寿命・介護予防・障がい・介護サービスとの調整など、病院外の健康福祉関係者との活発な連携も必要とされ、看護師の役割は多岐にわたってきている。

2025年を迎えるこの先、臨終に立ち会う人が病院看護師なのか在宅診療医師又は訪問看護師なのか、もしくは施設関係者なのかは計り知れないが、人生の最終段階での看護の関わりとして、一人の人間として尊厳を忘れてはいけぬ。看護は、人への深い理解の上に成り立ち、人と人との繋がりによるものであるという事を忘れず、この先も人々の心に寄り添う看護提供ができるように努力していきたい。